

## 協和運輸倉庫

# マルチスキル化を実現

## 問題点自ら気づき行動



協和運輸倉庫（高橋大輔社長、仙台市宮城野区）は業務の見直しや改善に取り組み、物流品質の向上を図るとともに、長時間労働の抑制など働きやすい職場環境の整備に努めている。先導役となるのが大和物流団地（宮城県大和町）に立地する物流センター「仙台LCC」だ。2008年

に菓子、食品の共同配送センターとして開設し、15年に増設した。平屋建ての定温倉庫（高床式）で、保管面積は1万2210平方メートル。メーカー工場からの商品を保管し、顧客の出荷データに基づいて荷物を仕分けした上で、東北6県の出荷先に配送する。スタッフは30人。ピッキングにはハ

倉庫内で「カイゼン」の陣頭指揮を執る仙台LCCの高橋部長

ンディーターミナルを活用し、ケースより小さい単位のボール出荷を行っている。

業務改善への取り組みは15年8月にスタート。「品質最優先で顧客の信頼と満足度を高める」を方針に掲げ、

①見える化・見せる化②単純化・標準化③現品と情報の一元管理——に取り組み、Q（品質）・C（費用）

・D（納期）の向上を目指している。

見える化では、あらゆる業務を数値化し、目標値と実績（現状）、改善度合いを表やグラフで表し、従業員の見える場所に貼り出す。例えば、スタッフごとに1時間当たりの生産性（処理数）を数値化し、前年同月比などを踏まえてその月の目標値を決めることにした。また、各人の出勤

予定時間などに加え、荷主からの監査結果も公開している。

また、入庫処理やボール出荷作業、フォークリフト点検作業など業務ごとに標準書をつくり、誰にでも作業が行える体制を整備し、マルチスキル化（応援・受援体制）を実現させた。各人が各部署を補える体制をつくり、仕事が1人に集中しないよう支援し、時間外労働などを削減。休日も取りやすくした。

情報の一元化では、1日単位のデータ管理を徹底し、タイムリーな改善を実施している。

仙台LCCの責任者である高橋明男第三営業部長（56）は、2年半が経過し、ようやく改善効果が見えてきた。マルチスキル化により、残業時間も大幅に短縮できた。大切なのは、自らが問題点に気づき、自発的に改善行動を起こすこと。人材育成でもある。更なる改善に取り組む」と意欲を見せる。

（黒田秀男）